

# 中学生における主体的な学びとライフキャリア・レジリエンスの関連

－学習に対するメタ認知活動と動機づけに着目して－

Relationship between proactive learning and life-career resilience in junior high school:  
Focusing on metacognitive activity and motivation

田 中 健史朗  
TANAKA Kenshiro

# 中学生における主体的な学びとライフキャリア・レジリエンスの関連

## ー学習に対するメタ認知活動と動機づけに着目してー

Relationship between proactive learning and life-career resilience in junior high school:  
Focusing on metacognitive activity and motivation

田中 健史朗<sup>\*1</sup>  
TANAKA Kenshiro

キーワード：ライフキャリア・レジリエンス，メタ認知活動，動機づけ，中学生

**要旨：**中学校においてキャリア教育の充実が求められている。特別活動を要としながらも、各教科教育においてもキャリア教育の一端を担う。そのため、本研究では学習における主体的な学びとライフキャリア・レジリエンス（以下、LCR）との関連を検討した。中学生405名を対象に調査を行い、主体的学びの指標となるメタ認知活動および動機づけと、LCRを測定した。メタ認知活動と動機づけを独立変数、LCRを従属変数とした重回帰分析の結果、メタ認知活動がLCRに有意な正と関連を示すことが明らかになった。また、動機づけについては、その種類によってLCRとの関連が異なることが明らかになった。このことから、学習内容が生徒のキャリアにどのように関連しているのかという点や学習内容の面白さを教師が伝えたり、生徒自身が考える機会を提供したりする指導が教科教育におけるキャリア教育の一助になることが考えられた。

## I. 問題と目的

### 1. キャリア教育

中学校におけるキャリア教育の充実が目指されている。2017年に中学校学習指導要領（文部科学省，2017）が改定された。第一章の総則では「キャリア教育の充実」が掲げられている。キャリア教育とは、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義されている（中央教育審議会，2011）。また、キャリア発達とは「社会のなかで自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程」とされている（中央教育審議会，2011）。つまり、職業人に向けた教育だけではなく、家庭のなかでの役割意識を育んだり、学級のなかで自分らしく生きる力を身に着けたりということもキャリア教育である。

現在のキャリア教育となるまでには、社会状況の影響を受けながら、学校教育のなかで求められるキャリア教育が変遷してきた。キャリア教育という言葉が登場したのは、新卒者のフリーター志向や若年無業者の増加、早期離職傾向が社会問題となっていた平成11年中央教育審議会答申の「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」であるとされている（文部科学省，2023）。その答申を受けて、学校教育において職業観や勤労観を体験的に学習する教育が進められた。その代表的な取り組みが職場体験活動である。また、職業観・勤労観の礎となる基本的な能力・態度として、「人間関係形成能力」、「情報活用能力」、「将来設計能力」、「意思決定能力」の育成が掲げられた。このような流れのなかで、キャリア教育がフリーター志向や若年無業者の増加を食い止める対策であるという懸

<sup>\*1</sup> 山梨大学教育学部山梨県小学校特別教育講座

念が学校現場に根強く、進学校ではキャリア教育の促進が遅れるという状況も生まれた。そのような課題が残ったことや、社会状況が変化していくことに伴い、キャリア教育では職業観や勤労観の礎となる能力の育成という側面に焦点を当てる形で変化していった。キャリア教育の草創期に掲げられた「職業観」、「勤労観」という用語は、現在のキャリア教育では用いられていない。

上記の変遷のなかで、現在のキャリア教育では育成すべき能力として4領域8能力が掲げられている（Figure 1）。領域は「人間関係形成・社会形成能力」、「自己理解・自己管理能力」、「課題対応能力」、「キャリアプランニング能力」に分けられ、それぞれさらに具体的な能力が挙げられている（文部科学省、2023）。中央教育審議会（2011）の「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」では、1つ目の「人間関係形成・社会形成能力」を「多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができるとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力」とされている。2つ目の「自己理解・自己管理能力」は、「自分が『できること』『意義を感じる』『したいこと』について、社会との相互関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動すると同時に、自らの思考や感情を律し、かつ、今後の成長のために進んで学ぼうとする力」としている。3つ目の「課題対応能力」は、「仕事をする上での様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決することができる力」としている。4つ目の「キャリアプランニング能力」は、「『働くこと』の意義を理解し、自らが果たすべき様々な立場や役割との関連を踏まえて『働くこと』を位置付け、多様な生き方に関する様々な情報を適切に取舍選択・活用しながら、自ら主体的に判断してキャリアを形成していく力」としている。この4領域8能力の考え方は学校教育のなかで受け入れられ、小学校・中学校・高等学校というそれぞれの発達段階において、その段階で目指すべき児童・生徒の姿が各学校で検討され、その姿に向けて教育活動が行われている。



Figure 1 キャリア教育で育成する能力（4領域8能力）

## 2. キャリア教育と主体的な学び

キャリア教育は特別活動を要しつつ、総合的な学習の時間、特別の教科道徳、そして教科教育のなかでも行うことが求められている。中学校学習指導要領の第1章総則の第4「生徒の発達の支援」では、「生徒が、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要しつつ各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること。その中で、生徒が自らの生き方を考え主体的に進路

を選択することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、組織的かつ計画的な進路指導を行うこと」との記載がある。要となる特別活動では、学級活動やボランティア活動、学校行事などの活動を通して、学級・学校内での役割を果たす体験をしたり、その過程で必要な能力を学習したりする。また、キャリア教育の代表的な活動であった職業体験活動は総合的な学習の時間に位置付けられている。その職業体験活動に向けて職業調べを行ったり、職業体験活動後の報告会を行ったりする機会も重要なキャリア教育の機会とされている。さらに、特別の教科道徳では、礼儀や場にあった言動の重要性を学習したり、勤労の尊さを学習したりする。

そして、教科教育もキャリア教育に重要な役割を担っている。新しい中学校学習指導要領が2021年度より全面実施された。この学習指導要領（文部科学省，2017）において、「学ぶことに興味や関心をもち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる」ことが「主体的な学び」であるとされている。また、中央教育審議会（2016）の答申においては、「学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる主体的な学びが実現できているか。子供自身が興味を持って積極的に取り組むとともに、学習活動を自ら振り返り意味付けたり、身に付いた資質・能力を自覚したり、共有したりすることが重要である」と述べられている。つまり、各教科の指導においても、生徒のキャリアやキャリア教育で育成する4領域8能力と関連づけを意識した指導が求められている。例えば、保健体育では規律やルールの大切さを伝えたり、理科で学習する内容と職業との関連を伝えたり、英語において円滑なコミュニケーションについて伝えたりということである。

### 3. ライフキャリア・レジリエンス

各教科等の指導においても、生徒が学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくよう指導することが求められている。そこで、本研究では教科学習における主体的な学びと、ライフキャリア・レジリエンスとの関連を検討する。キャリア教育で育成する能力の1つに、「ストレスマネジメント」が挙げられている（Figure 1）。社会のなかで生活していくなかではストレスを感じることもある。そのストレスに対してうまく対処できるかどうか、粘り強く活動できるか否かに関わる。例えば、受験直前の模試で良い成績が得られなかったときに、落ち込んだ気持ちを切り替えて学習を継続するのか、それが難しく学習をやめてしまうのかによってその後のパフォーマンスが異なる。このような困難やネガティブイベントから立ち直る力をレジリエンスと呼び、注目が集まっている。特に、ライフキャリア・レジリエンスという概念が提唱され、中学生のキャリア意識に与える影響の一要因として取り上げられている（荒木ら，2020）。ライフキャリア・レジリエンスとは、不安定な社会の中で自らライフキャリアを築き続ける力と定義されている（高橋ら，2015）。高橋ら（2015）は、中学生のライフキャリア・レジリエンスには5つの側面があることを明らかにしている。それは「長期的展望」、「多面的生活」、「継続的対処」、「楽観的思考」、「現実受容」である。それぞれの側面の特徴についてはTable 1に示す。

Table 1 ライフキャリア・レジリエンスの種類

・長期的展望：長期的な展望をもつ力
・多面的生活：仕事以外の生活の充実感に対する価値
・継続的対処：継続的に対処し続けられる力
・楽観的思考：楽観的に思考する力
・現実受容：現実を受け入れられる力

主体的な学びとライフキャリア・レジリエンスの関連について、粘り強く努力することや学習に取り組むことがその成果としてライフキャリア・レジリエンスを高めることが証明されている（中村・梅林・瀧野，2010）。また，ライフキャリア・レジリエンスが高まることが就職活動や継続的就労につながるとされている（高橋・鈴木，2019）。しかし，各教科教育における主体的な学びとライフキャリア・レジリエンスの関連を検討した研究はみられない。特別活動を要としながらも，各教科教育においてもキャリア教育の一端を担うことが求められている。各教科教育における主体的な学びとライフキャリア・レジリエンスとの関連を検討することで，教科教育のなかでのキャリア教育でおさえるべき観点についての知見を提供することができる。

#### 4. 本研究の目的

本研究では，教科学習に対する主体的な学びとキャリア教育で育成する能力に関連するライフキャリア・レジリエンスとの関連を明らかにする。主体的な学びを測定する指標として，学習に対するメタ認知活動と動機づけを取り上げる。学習におけるメタ認知活動とは，現在の学習状況を考慮し，後の学習の進行を調整する方略である（佐藤，1998）。これは，文部科学省が掲げる主体的な学びにおける「見通しをもって学習」，「自己の学習活動を振り返って次につなげる」と関連する概念である。中学生を対象とした研究において，この得点が学業成績を予測することが証明されている（西村・河村・櫻井，2011）。また，学習に対する動機づけは，文部科学省が掲げる主体的な学びにおける「学ぶことに興味や関心をもつ」，「自己のキャリア形成の方向性と関連づける」と関連する概念である。メタ認知活動と動機づけは，文部科学省が掲げる主体的な学びにおける「見通しをもって学習」，「自己の学習活動を振り返って次につなげる」，「興味や関心をもつ」，「自己のキャリア形成の方向性と関連づける」と関連する概念である。

## II. 方法

### 1. 調査内容

中学生における主体的な学びとキャリア教育で育成する能力に関連するライフキャリア・レジリエンスとの関連を明らかにするため，「学習におけるメタ認知活動」，「学習に対する動機づけ」，「ライフキャリア・レジリエンス」をアンケートにより調査した。

#### (1) 学習におけるメタ認知活動

学習におけるメタ認知活動を測定するため，市原・新井（2006）の中学生用メタ認知活動尺度を使用した。それぞれの項目について，「1. 全く当てはまらない（1点）」から「4. とても当てはまる（4点）」の4件法で回答してもらった。教示文は，「あなたの学習の仕方についてお尋ねします。以下の質問項目についてどの程度当てはまりますか」であった。

#### (2) 学習に対する動機づけ

自己決定理論（Deci & Ryan, 2002）によると，動機づけは自律性の程度によって「外的調整」，「取り入れて的調整」，「同一化的調整」，「内的調整」に分類されている。そのため，今回の調査においても，動機づけを4つの種類に分けて調査する。それぞれの動機づけの特徴をTable 2に示す。

Table 2 動機づけの種類

・外的調整：報酬の獲得や罰の回避，または社会的な規則などの外的な要求に基づく動機づけ
・取り入れ調整：自我拡張や他者比較による自己価値の維持，罪や恥の感覚の回避などに基づく動機づけ
・同一化的調整：活動を行う価値を認め，自分のものとして受け入れている状態を表す動機づけ
・内的調整：興味や楽しさに基づく従来の内発的動機づけに相当し，最も自律性の高い動機づけ

同一化的調整と内的調整の動機づけは，自律的な学習動機とされ，学業成績を予測することが証明されている（Guay & Vallerand, 1997）。一方，外的調整の動機づけは，学業成績に負の影響を与えることが証明されている（西村・河村・櫻井，2011）。

学習に対する動機づけを測定するため，西村・河村・櫻井（2011）の中学生用学習動機づけ尺度のなかから12項目（因子構造・因子負荷量を考慮して選定）を使用した。それぞれの項目について，「1. 全く当てはまらない（1点）」から「5. とても当てはまる（5点）」の5件法で回答してもらった。教示文は，「あなたの学習する理由についてお尋ねします。以下の項目は，あなたが学習する理由にどのくらいあてはまりますか」であった。

### （3）ライフキャリア・レジリエンス

中学校での学習内容に対するライフキャリア・レジリエンスを測定するため，高橋ら（2015）の中高校生版ライフキャリア・レジリエンス尺度のなかから15項目（因子構造・因子負荷量を考慮して選定）を使用した。それぞれの項目について，「1. 全く当てはまらない（1点）」から「5. とても当てはまる（5点）」の5件法で回答してもらった。教示文は，「あなたのごとの考え方についてお尋ねします。以下の質問があなたの考えにどの程度当てはまりますか」であった。

## 2. 調査時期

2023年4月にGoogleフォームを用いて実施した。

## 3. 調査協力者

中部地方の中学校1校の生徒405名（1年生：139名，2年生：135名，3年生：131名）から回答を得られた。

## 4. 倫理的配慮

倫理的配慮として以下の説明を行い，同意を得られた生徒からのみ回答を得た。「このアンケートは皆さまの学習について調査し，授業をより良いものに発展させる目的で実施されるアンケートです。アンケートの回答が学校の成績に影響することは絶対にありませんので，回答方法にそって率直にそれぞれの質問へお答えください。この調査の回答に，正解・不正解はありません。お答えいただいた内容は統計的に処理され，個人の回答が問題とされたり，他の人の目に触れたりすることは一切ありません。この調査のデータは研究終了後責任をもって処分させていただきます」と説明した。なお，本調査は学校長，各学級の担任の先生に調査実施の承諾を得て実施した。

## Ⅲ. 結果

### 1. 各変数の記述統計

先行研究の因子構造を基に，尺度の信頼性を算出したところ， $\alpha=.66\sim.91$ であった。おおむね尺度

の信頼性が確認できたため、各因子項目の加算平均を下位尺度得点とした。学習におけるメタ認知活動、学習に対する動機づけ、ライフキャリア・レジリエンスのそれぞれの得点の平均値と標準偏差を算出した (Table 3)。

Table 3 各尺度得点の平均値, 標準偏差 (N=405)

	平均値	標準偏差
<メタ認知活動>		
メタ認知活動	3.35	.46
<動機づけ>		
内的調整	3.42	1.05
同一化的調整	4.31	.90
取り入れ的調整	3.38	1.09
外的調整	2.79	1.24
<ライフキャリア・レジリエンス>		
長期的展望	4.40	.64
多面的生活	4.67	.60
継続的対処	3.93	.78
楽観的思考	3.86	.88
現実受容	3.74	.75

## 2. 各変数間の関連

各変数間の関連を明らかにするため、各下位尺度得点間の相関分析を行った (Table 4)。その結果、長期的展望とメタ認知活動および動機づけの間にはおおむね有意な正の相関がみられたが、外的調整との間には有意な負の相関がみられた。多面的生活とメタ認知活動および動機づけの間にはおおむね有意な正の相関がみられたが、外的調整とは有意な相関がみられなかった。継続的対処とメタ認知活動および動機づけの間にはおおむね有意な正の相関がみられたが、外的調整との間には有意な負の相関がみられた。楽観的思考とメタ認知活動および動機づけの間にはおおむね有意な正の相関がみられたが、外的調整とは有意な相関がみられなかった。現実受容とメタ認知活動および動機づけの間にはおおむね有意な正の相関がみられたが、外的調整とは有意な相関がみられなかった。

Table 4 各下位尺度得点の相関分析結果 (N=405)

	2	3	4	5	6	7	8	9	10
<メタ認知活動>									
1. メタ認知活動	.49 **	.53 **	.34 **	-.15 *	.56 **	.42 **	.56 **	.25 **	.30 **
<動機づけ>									
2. 内的調整		.31 **	.33 **	-.17 **	.37 **	.17 **	.43 **	.21 **	.10 *
3. 同一化的調整			.40 **	-.05	.45 **	.44 **	.35 **	.15 **	.27 **
4. 取り入れ的調整				.22 **	.29 **	.33 **	.28 **	.20 **	.18 **
5. 外的調整					-.13 **	-.06	-.11 *	.06	.09
<LCR>									
6. 長期的展望						.53 **	.58 **	.38 **	.31 **
7. 多面的生活							.41 **	.31 **	.28 **
8. 継続的対処								.43 **	.37 **
9. 楽観的思考									.42 **
10. 現実受容									

※ LCR はライフキャリア・レジリエンスの略

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$

### 3. ライフキャリア・レジリエンスを促す要因

学習におけるメタ認知活動および学習に対する動機づけがライフキャリア・レジリエンスに与える影響を検討するため、メタ認知活動および動機づけを独立変数、ライフキャリア・レジリエンスを従属変数とした重回帰分析（強制投入法）を行った（Table 5）。その結果、ライフキャリア・レジリエンスのすべての因子にメタ認知活動が有意な正の影響を与えていた。

動機づけについては、動機づけの種類によって関連するライフキャリア・レジリエンスの因子が異なっていた。継続的対処には内的調整が有意な正の影響を与えていた。内的調整は多面的生活とも有意な関連がみられているが、影響力は弱く、サンプルの大きさが影響していると考えられる。同一化的調整については、長期的展望、多面的生活、現実受容に有意な正の影響を与えていた。取り入れ的調整については、多面的生活に有意な正の影響を与えていた。外的調整は現実受容に有意な関連がみられているが、影響力は弱く、サンプルの大きさが影響していると考えられる。

Table 5 ライフキャリア・レジリエンスを促す要因 (N=405)

独立変数	長期的展望 $\beta$	多面的生活 $\beta$	継続的対処 $\beta$	楽観的思考 $\beta$	現実受容 $\beta$
<メタ認知活動>					
メタ認知活動	.38 ***	.26 ***	.42 ***	.19 **	.26 ***
<動機づけ>					
内的調整	.09	-.11 *	.18 ***	.11	-.06
同一化的調整	.19 ***	.26 ***	.05	-.01	.15 **
取り入れ的調整	.07	.19 ***	.06	.08	.02
外的調整	-.07	-.07	-.03	.09	.12 *
調整済み $R^2$	.35 ***	.26 ***	.34 ***	.08 ***	.11 ***

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

## IV. 考察

本研究では、学習に対する主体的な学びとキャリア教育で育成する能力に関連するライフキャリア・レジリエンスとの関連を明らかにするため、中学生を対象としたアンケート調査を行った。主体的な学びの指標として、メタ認知活動と動機づけを取り上げた。それぞれの変数の関連を分析した結果について考察を行う。

### 1. 学習に対するメタ認知活動とライフキャリア・レジリエンスの関連

ライフキャリア・レジリエンスのすべての因子にメタ認知活動が有意な正の影響を与えていた。つまり、学習に対するメタ認知活動を行う生徒ほどライフキャリア・レジリエンスの力が高いということである。長尾ら（2008）はレジリエンス尺度を作成のなかで、レジリエンスには自己調整が重要であることを見出している。ここでいう自己調整とは、困難やネガティブイベントに対して解決方法を考えたり、次に何ができるか考えたりすることを指している。メタ認知活動は、まさにメタ的に状況を思考し、自身の行動を振り返る学習方略であり、教科教育のなかでメタ認知活動を育む指導を行っていることは、ライフキャリア・レジリエンスを育むことにつながる可能性が示唆された。

メタ認知活動を育む指導法について実践研究が行われている。福谷・皆川（2022）は、中学生の社会科教育の学習場面において、既有知識と授業で新規に学習する内容を関連づけるポートフォリオの導入を行い、その効果検証を行っている。また、田中・進藤（2022）は、中学校において主体的な学びのプロセスモデルを意識した授業改善を行う実践研究を報告している。さらに、堀（2018）は



OPPA (One Page Portfolio Assessment) という学習を振り返るためのツールを開発している。OPPAは、ひと目で生徒が自身の学習過程を振り返られるように構成されており、授業で学習している内容をこれまでの学習過程に位置づけることや今後の見通しをもつ手助けになると考えられる。田中・進藤(2023)の授業実践でもOPPAの理論を基にしたワークシートが活用されている。

このように、教科教育のなかでのキャリア教育を実践していくときには、生徒が自身の学習について立ち止まって振り返る仕組みを設定することは有効だと考えられる。特に、自己調整的な学習方略であるメタ認知活動の方略を習得させることが教科教育におけるキャリア教育へとつながる可能性が示唆された。

## 2. 学習に対する動機づけとライフキャリア・レジリエンスの関連

動機づけについては、動機づけの種類によって関連するライフキャリア・レジリエンスの因子が異なっていた。内的調整が継続的対処に有意な正の影響を与えていた。つまり、学習内容に対する面白さを感じている生徒は、継続的に対処し続けられる力が高いということである。継続的対処とは、粘り強く継続的に対処し続ける力である。内的調整の動機づけは、自律的な学習動機とされ、粘り強く継続的に学習することを促進することが明らかになっている (Guay & Vallerand, 1997)。様々な活動に対して、大変な部分だけに着目するのではなく、そのなかに活動の面白さを見出すことができる力は、困難やネガティブイベントに対しても粘り強く取り組むことができることにつながる可能性がある。教科教育の場面においても、悪い点数をとらないように勉強する、受験のために勉強するという他律的な動機づけでなく、主体的にその学習内容の面白さや価値を見出すことを促すことが重要だと考えられる。そして、この力は教師の働きかけによって促すことができるとされている。解良ら(2016)は、学習している内容の利用価値を教師が教授するという実践を行っている。つまり、学習内容の面白さを教師が伝えるということである。それによって、その教授を受けた対象者の自律的な動機づけが高まることが証明された。このように、教科教育において学習内容の面白さを伝える指導や、生徒自身が学習内容の面白さについて考える機会を提供するなどの介入が、教科教育におけるキャリア教育の一助になることが考えられる。

同一化的調整は、長期的展望や多面的生活、現実受容に有意な正の影響を示した。同一化的調整とは、活動を行う価値を認め、自分のものとして受け入れている状態を表す動機づけである (Deci & Ryan, 2002)。この動機づけは、文部科学省が掲げる主体的な学びにおける「自己のキャリア形成の方向性と関連づける」と関連する概念である。そして、それと関連した長期的展望は先を見通す力であり、多面的生活は仕事以外の充実感に目を向ける力、現実受容は現実を受け入れる力である。教科教育における学習内容を自身のキャリアと関連づけることができている生徒は、これらのライフキャリア・レジリエンスが高くなるということである。福谷・皆川(2022)は、中学生を対象に自己調整学習の理論を用いて、学習内容を振り返り、自身との関連づけを行う介入を実践したところ、実践後に同一化的調整の得点が有意に上昇することを明らかにしている。田中・進藤(2023)でも同様の結果が示されている。このように、学習内容が生徒の今後のキャリアにどのように関連しているのかを教師が伝えたり、生徒自身が考える機会を提供したりする指導が、教科教育におけるキャリア教育では特に重要であると考えられる。

最後に、取入れ的調整が多面的生活に有意な正の関連を示していた。取入れ的調整とは、自我拡張や他者比較による自己価値の維持、罪や恥の感覚の回避などに基づく動機づけである。多面的生活とは、仕事以外の生活の充実感に対する価値を重視することである。何か1つの活動に重きをおいている場合、その活動がうまくいかないと、プライドが傷ついたり、恥の感覚が強くと生じたりすると考えられる。一方、複数の活動にそれぞれ重きをおいている場合、1つの活動がうまくいなくても、

他の活動があるのでプライドの傷つきや恥の生起は少ないと考えられる。そのため、取入れ調整の動機づけを強く抱いている生徒は、自己防衛の手段として、1つの活動だけに重きをおかず、複数の活動に価値をおいているため多面的生活の得点が高くなったと考えられる。ただし、これは悪いことではなく、ネガティブイベントに対して長期に切り替えを行うためには重要な要素である。恥の感情の生起は精神症状の引き金になることが指摘されている（田中，2023）。

### 3. まとめ

本研究では、学習に対する主体的な学びとキャリア教育で育成する能力に関連するライフキャリア・レジリエンスとの関連し、その分析結果から教科教育におけるキャリア教育の一助について考察した。これまでの研究では教科教育における主体的な学びとライフキャリア・レジリエンスの関連を検討した研究はみられない。しかし、特別活動を要しながらも、各教科教育においてもキャリア教育の一端を担うことが求められている。本研究によって、教科教育がキャリア教育の一端を担うためにおさえるべき観点についての知見をひとつ提供することができたと考えられる。

しかし、本研究には課題も残っている。本研究はアンケート調査により変数間の関連を分析したに過ぎず、より実践的な研究が必要である。また、各教科にはそれぞれの特徴があり、教科ごとや単元ごとにキャリア教育との関連を検討することも重要である。さらに、各下位尺度得点の平均値をみると非常に高い得点となっており、天井効果がみられていることも考えられる。1中学校のみの調査ではなく、様々な学校でデータをとったり、アンケート以外の方法でデータをとったりするなどの工夫も今後必要であると考えられる。

### 引用文献

- 荒木淳子・高橋薫・柏原拓史・佐藤朝美（2020）. 地域の大人との対話が中学生のキャリア意識に与える影響の分析－ライフキャリア・レジリエンスと自尊感情に着目して、日本教育工学論文誌, 44, 169-172.
- 中央教育審議会（2011）. 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方.
- 中央教育審議会（2016）. 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (Eds.) (2002). *Handbook of self-determination research*. Rochester, NY: University of Rochester Press.
- 福谷泰斗・皆川直凡（2022）. 自己調整学習の理論に基づく振り返り活動が中学生の学習動機づけに与える影響：ポートフォリオを導入した社会科学習プログラムの開発とその教育効果の検証, 応用教育心理学研究, 38, 47-60.
- Guay, F., & Vallerand, R. J. (1997). Social context, students' motivation, and academic achievement: Toward a process model. *Social Psychology of Education*, 1, 211-233.
- 堀哲夫（2018）. 資質・能力を育てる教育評価に関する研究：OPPA論を中心にして, 教育実践学研究：山梨大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 23, 305-317.
- 市原学・新井邦二郎（2006）. 数学学習場面における動機づけモデルの検討－メタ認知の調整考査－, 教育心理学研究, 54, 199-201.
- 解良優基・中谷素之・梅本貴豊・中西満悠・柳澤香那子（2016）. 利用価値介入が大学生の課題価値の認知に及ぼす影響, 日本教育工学会論文誌, 40, 57-60.
- 文部科学省（2017）. 学習指導要領.
- 文部科学省（2023）. 中学校・高等学校キャリア教育の手引き.
- 長尾史英・芝崎美和・山崎晃（2008）. 幼児用レジリエンス尺度の作成, 幼年教育研究年報, 30, 33-39.
- 中村有吾・梅林厚子・瀧野揚三（2010）. 発達段階別に見た本邦におけるレジリエンス研究の動向－幼児期から青年期まで, 学校危機とメンタルケア, 2, 35-46.

- 西村多久磨・河村茂雄・櫻井茂男（2011）. 自律的な学習動機づけとメタ認知的方略が学業成績を予測するプロセス—内発的な学習動機づけは学業成績を予測することができるのか？—, 教育心理学研究, 59, 77-87.
- 高橋美保（2015）. 中学生を対象としたライフキャリア教育プログラムの開発と効果研究—ライフキャリア・レジリエンスを高めるために.（東京大学教育学部カリキュラム・イノベーション研究会（編）, カリキュラム・イノベーション—新しい学びの創造へ向けて, 東京大学出版会, 東京.
- 高橋美保・石津和子・森田慎一郎（2015）. 成人版ライフキャリア・レジリエンス尺度の作成, 臨床心理学, 15, 507-516.
- 高橋美保・鈴木悠平（2019）. ライフキャリア・レジリエンスプログラムの開発と効果評価—障害者の就職と定着を目指して, 教育心理学研究, 67, 26-39.
- 田中健史朗（2023）. 「症状」は恥に起因する：感情制御, 臨床心理学, 23, 393-398.
- 田中健史朗・進藤秀俊（2023）. 中学生の主体的な学びを引き出す授業実践：自己調整学習に着目して, 山梨大学教育学部紀要, 33, 1-11.